

## 蘭に魅せられて

産業技術総合研究所 光技術研究部門

西井 準治

### Orchid entrancing my mind

AIST, PRI

Junji Nishii

梅田から阪急宝塚線で20分ほど走り、産総研関西センターの最寄り駅である池田を過ぎると、猪名川を渡り、兵庫県に入る。県境あたりから右手に標高300メートル足らずの石切山が見えてくる。我が家はその麓にある。そのあたりから周囲の景色が少しずつ変わる。電車は雲雀丘花屋敷という高級住宅街の緩い勾配に差し掛かり、速度もゆっくりになる。気のせいか空気がきれいになったように感じる。住宅街を抜け、さらにひと駅走ると、左右が再び開け、山本という駅に着く。駅から南に下っても、北に上がっても、ぼつぼつと畑や空き地がある。そして、そこには野菜ではなく花木や樹木が植えられている。このあたりは長尾地区とよばれ、約千年の伝統を持つ植木の産地として知られている。梅田まで30分という利便性に人気が集まり、昨今は一戸建てやマンションが建ち並ぶようになったが、現在でも500軒余りの植木業者が集中しており、毎年4月と10月には業者による「宝塚植木まつり」が開催される。

私は20年ほど前から、休日には時々長尾地区に出かけるようになった。栽培に関する専門知識は全くといっていいほど無いにも関わら

ず、植物を見るのが好きだったからである。当時の我が家は共働きで、家内がシフト勤務だったこともあり、親の指示に完璧に従ってくれた当時の我が子は、いやがりもせず付き合ってくれた。この地区のおもしろさは、専門分野に特化した店が集結し、互いに高いレベルで技術を競いあっていることだ。例えばセントポーリアの専門店に入り、ホームセンターや花屋さんではお目にかかったこともない高級品種を見ると、なんだか得した気分になる。現在、職場でセントポーリアを育て続けている理由はここにあるのかもしれない。ハイビスカスやブーゲンビリアは、購入から15年ほど経った今も健在で、真夏に咲く真っ赤な花々は実に美しいと思う。世話が比較的容易なこの種の植物の一方で、長年、悪戦苦闘しているのが蘭である。晩秋の頃、長尾地区の民家に隣接した蘭専門の温室にふらりと入ると、職人さんが丁寧に説明してくれる。出荷を待つ開花直前の株や、株分け途中の作業場も見ることができる。これがほしいと指さすと、その場で値段を決めてくれる。もちろん、町中の花屋さんより安い、と思って購入する。

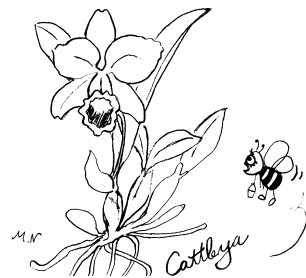
花を付けない蘭の株は何とも味気なく、観葉する気にもならない。放っておくと右や左に間延びして、鉢から飛び出して下向きに成長した

りする。しかしながら、いったん開花すると、周囲の人間は必ず一度は目を向けてしまう。蘭の魅力はその落差にある、と私は思った。そう思った時には完全にハマっていた。何冊もの本を買い込み、デンドロ、オンシ、ファレノプシス、デンファレ、カトレアなど様々な品種の株を入手してみた。シンガポールに買いに行ったこともある。多くの人がそうであろうが、初期はどうしてもカトレアに惹かれる。当初、私も20種類ほどのカトレアを集めた。東京ドームで毎年開催される世界蘭展に出かけて、台湾の業者から何種類か買ったこともある。冬は屋内の手作り温室に入れ、春から秋の間は軒下に吊り下げ、直射日光に当てないように毎日世話をする。しかし、思うように咲いてくれない。実に薄情な植物である。ミニ種は比較的簡単だが、巨大輪になるほど難しい。十分に成長した親株であるにもかかわらず、どうして花芽を付けないのかと長尾地区に聞きに行くと、「カトレアは蘭の中でも一番簡単やで」と軽くあしらわれた。そう言われると一層気合いが入ったが、専門書に書いてあること以外になすすべもない。しばらくは辛抱強く単調な世話を続けるしかなかった。冬咲きの蘭の栽培は5月から7月が勝負で、その時点で、秋に花芽を付けるかどうか判断できる。その様子が見られなければ翌年までお預けなのである。普通の人はここで諦めて捨てるのだろうが、当時、自宅にいる時の私には子育て以外にすることもなかったので、何となく世話をし続けた。すると、購入から3、4年目の初夏だったと思うが、朝の水やりの際にふと見ると、大輪株に花芽の前兆が見られ、大いに感動したことを覚えている。

いったん花芽を付けはじめた株達は、少々乱暴に株分けしても、水やりや施肥をさぼっても、ほぼ確実に毎年開花するようになった。どうしてだろうと後から思うに、我が家の環境に株自身が適応したとしか思えない。ある大学の先生への年賀状にこのことを書くと、「単純な

原理の工学より、生物の神秘に学べ」と言われたが、全くそのとおりである。夏場には30℃を軽く超え、冬場には10℃を下回るような環境に置かれても、年に一度だけ、必ず開花するその生命力には甚だ感心させられる。

開花しはじめた株は、我が家の食卓の窓辺に吊り下げる。ちょうどこの時期は半月毎にいろいろな品種の蘭が私だけを楽しませる。というのは、家族は花以外の部分、特に苔で薄汚くなった鉢がお気に召さないようである。申し訳ないとは思いつつ、蚊に刺されながらの夏場の世話を思うと、少しでも長い時間、見ていたいと思うのである。カトレアの花は個性的で気品がある。ここ10年以上咲き続けている濃いピンクの「ボナンザクイーン」は特にお気に入りである。今では品種改良が進み、このような単調な色合いの花は店に置いても売れないとのことだが、素朴な中の可憐さが心を和ませてくれる、と私は思い込んでおり、おそらくこの先も育て続けるであろう。



余談だが、これまで蘭以外のいくつかの動植物に手を出してきた。特に30代後半には、熱帯魚にかなりハマってしまった時期がある。グッピーやネオンテトラの繁殖で腕を上げた後に、近所の愛好家からディスカスのペアを分けってもらった。体長20センチメートルほどのコバルトブルーの親である。毎日私の帰宅を待っており、餌をねだるしぐさは何ともかわいく、間もなく産卵と孵化を見せてもらった。卵に向かって絶えず口から水を吹きかけ孵化を待つ親

の姿に感動しない人はいないであろう。だが、水作りと水槽の世話の技量不足で、病気になってしまった。安易に手を出すべきではなかったと今でも後悔している。そんな中、我が家の環境に慣れた蘭の品種は着々と増え、ここ数年は鉢数を減らすことに頭を悩ませている。時には町内のバザーに出して、鉢数を半分に減らしたりもしたが、すぐに元に戻ってしまう。実に繁殖が旺盛な植物なのだ。



私は元々暑い所が好きで、ほとんどの旅行は南方面である。昨年の暮れには八重山に行った。目的は蘭の栽培業者を訪ねること。あいにくの雨だったが、気温は23℃前後と、蘭にとっては最高の環境である。家内と2人でハウスに入ると、たまたま居合わせたオーナーが愛想よく出迎えてくれた。カトレアはあるかと聞いたが、栽培が簡単だし、人気がないので扱っていないとの返事。ホームページに掲載しておきながら、それはないだろうと思ったが、その代わりに出迎えてくれたのは、デンファレとファレノプシスの大群であった。敷地の半分、5000坪のビニールハウスにびっしりと並んでおり、久々に感動した。こんなに育ててどうするのかと思うほど凄い。ちなみに、残りの半分のハウスにはパイナップルとスターフルーツが鈴生りであった。沖縄出身のオーナーは私より少し年配の様だが、生き生きとしており、実に楽しそうに案内してくれた。やはり人生、好きなことをし

て過ごすのが一番だと痛感した。帰り際、もうこれ以上増やせないと思いつつ、オリジナルのファレノプシスの大株を2つ購入した。おまけにデンファレの苗ももらった。見送ってくれるオーナーを見ていると、いつか自分もそうなれたらいいなあと思ってしまった。

こんなことばかり書いていると、つい忘れてしまいそうだが、私は産総研の職員である。思えば、単純な原理の工学系の仕事に就いて25年になるが、花芽さえ付けたことがない。ここ数年、特に独法後は細かな仕事の量が急激に増え、家にいる時間が8時間を切る。こんな生活をしていては開花など到底あり得ないと思いつつ、昨今は、根腐れを起こしているかもしれない、ふと下半身を見ることもある。私と同年代の工学系の人々も、きっと同じ思いではないか。そんな中での蘭の世話は週末にするのが精一杯で、水苔がカチンカチンになっていることもある。それでも、我が身に蓄えた水分で生き延び、開花、繁殖を繰り返すカトレアやデンファレ、デンドロを見ていると、とりあえず自分も行ける所まで行ってみようと思う。八重山に移り住むのはその後にしよう。いやまてよ。家内が付いてきてくれないだろうから、やっぱり近所に土地を借りようか。頭の中で夢だけが空回りする今日この頃である。

